

# —伊野川から忠別川までの地名②—

## 忠別川のアイヌ語名(上)

前回、明治四十三年改版の陸地測量部『北海道仮製五万分一図』で、石狩川の一次河川として忠別川が初めて登場した。当連載の③の深川市との境界の川である内大部川から、石狩川を遡りアイヌ語地名を紹介してきて、流路延長五十七キロの大支流の忠別川に漸くたどりついた。

忠別川は、「旭川」の名称由来の川で、当連載の①～④の「忠別川」、また、③の「再び〈旭川〉の地名起源」で詳述したこともあり、重複する部分があるが、ご了承いただきたい。

写真①は、旭川駅舎内にある石川啄木像である。石川啄木が明治四十一年一月二十日に、小樽から釧路に向かう途次、旭川駅前の宮越屋旅館（啄木は「旅店」

と表記）に午後三時十五分に投宿する。その夜、「旭川」の名称由来について、次のように記述している。忠別川が旭川駅裏を流れている、啄木が「旭川」の名称の由来を書いているのは、感概深い。

旭川はアイヌ語でチウベツ（忠別）と云ふさうな、チウは日の出、ベツは川、日の出る方から来る川と云ふ意味なさうで、旭川はその意訳だと先生（註――文中では東泉先生、実際は釧路新聞の白石社長）が話された。明治四十一年『小樽日報』掲載。岩波書店『啄木全集――第九巻』――「雪中行」

同行の釧路新聞の白石社長から、

「旭川」の名称の由来を聞かされる場面である。当時の知識人の代表である釧路新聞の社長でも、「旭川」の名称の由来については、チウ(ciw)水流、波)と、チュブ(cup 太陽、日)を誤って理解していることが判明する。

明治二十三年九月二十日、北海道庁令六十一号により、石狩国上川郡に、

忠別川のアイヌ語名は、「チュブペ

ツ(cup-pe 太陽、日・川)」で、

忠別川の水源は、東にあって、太陽や

月が出る所なので名付けられたもので、これを意訳して、明治二十三年、旭

写真②の明治三十一年製版の陸地測量部『北海道仮製五万分一図』では、忠別川が、「チュブペツ」と永田方正説で書かれている。

右の永田方正説に対し、明治三十八年にジョン・バチャエラは、次のように「チュブペツ」説に異議を唱えた。

忠別川は、チウペツ(ciw-pet)急なる川current riverである。チウペツは日本人により、チュブペツ、即ち、〈太陽の河〉の如く誤られたる為、「旭川」(昇る日の川)なる誤名を得たり。――「アイヌ地名考」

バチャエラの「忠別川急流説」は、昭和三十五年になつて、知里真志保の

した。

旭川村、神居村、永山村の三村が設置されて、初めて「旭川」の名称が誕生

した。田方正は、明治二十四年に『北海道蝦夷語地名解』の中で、「忠別川」について、次のように地名解をした。

チュブペツ(cup-pe t)――東川。「チュブカペツ」に同じ。此川の水源は東にありて、日月の出る處故に名づく。明治廿三年旭川村を置く。

忠別川のアイヌ語名は、「チュブペツ(cup-pe t太陽、日・川)」で、忠別川の水源は、東にあって、太陽や月が出る所なので名付けられたもので、これを意訳して、明治二十三年、旭



写真② 明治31年製版『北海道仮製五万分一図』

忠別川(ちゅうべつがわ)。「チウペツ(ciw-pe t 波・川)」は、「波だつ川」の義。それが後に民間語原解によつて、「チュッペツ(cup-pe 日・川)となり、意訳して旭川という地名が生まれ、また、「チュブ(cup 日)と「チュブカ」(cupka 東)とを混同して東川などといふ地名も生まれた。

昭和三十五年以降は、右の知里の「チウペツ(ciw-pe t 波・川)」↓急流説が主流となつた。

## 断章 旭川のアイヌ語 地名研究

(139)

高橋 基



写真① 石川啄木像